



Amazon De Paris



b-svaha

アリゾナ州はフェニックスの町に、Amazon De Paris というバーがあった。

店のオーナーが、大のパリ好きということで、そんな名前がついていた。

貴金属や珍しい石を求めて世界中を行商して回っていた僕は、この町にも数ヶ月ほど滞在したことがあった。その頃、ここいらでしか採れないレアな石が、近隣の鉱山で見つかったのだ。

毎日砂埃にまみれて採掘業者やその卸先を訪ね、質がよく安価で大量に買える取引先を探し歩いた。日がな一日、西へ東へと5000ccのマスタングで奔走したあとホテルに戻り、歩いてこのバーに行くのが、僕の小さな楽しみだった。

店内には、フランス印象派の絵が所々に飾られ、パリのカフェや居酒屋の雰囲気を醸すような椅子やアンティークなどで調えられ、砂漠の真ん中でプチパリの気分を楽しめる場所だった。

ところが、一端バーテンダーのいるカウンターから先に目を向けると、そこは、まるでアマゾンのジャングルという様相に仕上げられていた。

壁には、熱帯植物の蔦が覆い、天井からは、葉っぱや太い蔓が垂れ下がり、赤い大きな造花が鮮やかに咲いていた。

葉陰からは、ニシキヘビのフェイクが顔を出し、ショータイムでは、バーテンダーが漁人やターザンのいで立ちで客を楽しませ、ウエイトレスは、腰の横が大胆に裂けたアマゾネス風のショーツで動き回っていた。

二つのまったく違う文明を、強引に一つにしてはばからない雰囲気とそのナンセンスさが、なぜか僕をくつろがせ元気づけてくれた。

僕は、このバーで2～3杯のウォッカをちびちびとやりながら、バーテンたちと少しの会話を楽しむことが多かったが、ときどき、居合わせたほかの客といろいろな話に花を咲かせることもあった。

その中で、特に強く印象に残った一人に、ヴィッキーという女性がいた。毎日のようにバーで彼女と話をするようになり、僕は、彼女から、大切な何かを受け取った。

彼女はいわゆる、春を売ることによって生活の糧を得ていたが、彼女自身は、自らをセックスセラピストと呼び、エロスの女神、セックスゴッドスを自認し、左足首には、「道」という漢字のタトゥーが入っていた。

ヴィッキーが自らをそう呼ぶには、それなりの理由があった。

まず彼女は、自分からは、決して客に金を請求することはなかったが、男たちは、情事のあと、感謝と喜び、安らぎをもって、自ら彼女に謝礼を差し出した。

通常、ヴィッキーと3回も情事を重ねると、妻やガールフレンドとの関係が改善し、男たちが彼女に戻ることはなかった。

中には、最後に大きな謝礼を渡す者や結婚を迫る者もいたが、結婚には応じなかった。

実際、僕は、彼女が求婚される場面に居合わせたこともあり、バーテンたちから、彼女が僕に話した内容と同様の話を聞くこともあった。

また、ヴィッキーは、金の力にもものを言わせようとする輩は直感で直ぐに見分け、すべて門前払いにした。

ヴィッキーはあるとき、こんな風に言った。

「あたしは、決して病気を貰わないし、移すこともない。

能力はあるけど、妊娠することもないわ。

なぜって、あたしがそう決めているから」

またあるときは、こんなことも言っていた。

「あたしは自分の好きでセックスしているから、やりたくないときは決してしないの。

やるときは、目一杯快楽に浸って男を求め、そして、相手に尽くすの。そして、終わったら、それだけよ。

だから、決してエネルギーが枯れることはないし、もし変なエネルギーをもらったら、全部のチャクラを直ぐに自分で浄化しちゃうわ！」

ヴィッキーは、過度に男たちの欲望を掻き立てる服を着るわけでも、街角に立って客を物色するわけでもなかった。

酒場で飲んだり、スーパーで買い物したり、公園でボツとしたりしていると、自然にその日の「クライアント」に出会うのだった。

そして、それで十分に暮らせたのだ。

「わたしの夢はね...

何にも知らない小娘だったころ、やけを起こして飛び込んだ娼婦の世界で味わったすべての体験を生かして、本物のセラピストとして開業することなの。

もちろん、セックス専門のね」

あるとき彼女は、嬉しそうにそう話してくれた。

僕は、ヴィッキーの話を聞くようになってから、両親のことをよく考えるようになった。

僕は、父親が大嫌いだった。

親父は、典型的な英雄豪傑信奉者で、男たるものの価値と力は、色恋の数に比例すると信じて疑わなかった。そのお陰で、母がどれほど辛く惨めな思いをしても、どこ吹く風を決め込んでいた。

あちこちに女を囲い子供を作った親父だから、家計は火の車で、僕らは貧しい生活を強いられた。

僕は、決して親父のような女狂いの男にはなるまいと心に誓ったが、だからといって、僕がこれまでに付き合った女性をどれだけ幸せにすることができたかを思うとき、自分も親父とさして変わらない大人になっていたことに気づいた。

一人の女性に縛られるのを恐れ、信じてすべてを捧げた女性に裏切られ、心が無残に引き裂かれるのが怖くて、いつも最後の一步を越えることができなかったのだ。

結局、僕は、愛を知らなかったのかもしれない。

だから僕は、恋愛に関しやりたい放題ができる親父を憎み、それを許す母や女性たちを軽蔑し責めていたのだ。

僕は、ヴィッキーと肉体関係をもつことはなかったが、彼女と会って話すようになってから、少しずつ心のどこかが軽くなるのを感じていた。

その後、親父は、不節操が祟って病気となり、いまでこそ放蕩三昧はできない体となったが、母はそんな親父に寄り添うようにして仲睦まじく暮らしている。まるで、親父の数々の不倫も裏切りも、存在しなかったかのように...

「わたしが世界だと思って好き放題をしていたところは、結局、母さんの手のひらの中だったんだ...」

この間、数年ぶりに帰郷した僕に、親父は、神にでも手を合わせるかのようにして、ポツリとそう語った。

今思えば、親父のやり方は、あながち間違いではなかったのかもしれない。それは、起きているときには、家族には大変な修羅場だったわけだが、終わってみれば、それも親父流の悟りへの道だったのかもしれない。

現に今、親父と母は、とても幸せそうに暮らしているのだから...

ヴィッキーに会うことで、僕は父との過去を手放す準備をさせてもらった気がする。

仕事柄、僕は世界中を旅し、いろんな男や女たちに出会ってきた。商人、技術屋、大学教授、医者、セラピスト、カウンセラー、娼婦、ギャングのボスなど、裏社会の人間とも時には付き合ってきた。

しかし、その中の誰一人として、自由さと純一さ、潔さにおいて、ヴィッキーに優る人物はいなかった。

ヴィッキーのやっていることが、モラル的に、法的にどうなのかと言われても、僕には答えられない。

ただ、彼女が僕の心を、そして、係わった多くの男や女たちの心を、医者やセラピスト以上に癒していたことは事実なのだ。

Amazon De Paris は、もうあの町にはない。

オーナーが変わり、ナンセンスな無駄として、アマゾンバーをすっかりパリ風に改修し、バーテンやウエイトレスたちのスタイルをまともなものに変えて以来、客足が徐々に遠のき、一年で店を閉めたという噂だった。

無駄と見え、下劣と見え、一見馬鹿げたもの、何の役にも立たないように思えるものが、実は、人の心を癒し、支え、育てているのかも知れない。

親父の放蕩人生も、

Amazon De Paris のバーも、

そして、

ヴィッキーという、一人の名もない、

気丈で、けな気で、どこかあやう気な女性の人生も....。